

敬語形式の違いに対する印象の統計的分析

丸元 聡子^{*1}, 白土 保^{*2}, 井佐原 均^{*2}

^{*1} 計量計画研究所, ^{*2} 通信総合研究所

smarumoto@ibs.or.jp

1. はじめに

日本語の敬語表現のうち、代表的なものとして、名詞を用いたものと動詞を用いたものがある。このうち、動詞を用いたものには、概ね、以下の3つのタイプがある。タイプ1は、「ます」「れる」「られる」などの助詞・助動詞を動詞と組み合わせるもの、タイプ2は、「お話しになる」「ご説明する」のように「お～になる」「ご～する」などの枠組みと動詞とを組み合わせるもの、タイプ3は、「おっしゃる」「申す」のように動詞自体を交替させるものである。

このうち、タイプ2は枠組みの学習が必要であるため、他のタイプに比べて、その学習が容易ではないと考えられる。実際、敬語表現の自然さの印象に関する我々の実験においては、タイプ2の学習が容易ではなく、特に、自然さに関する傾向として、接頭辞「お」を用いた表現と接頭辞「ご」を用いた表現に差異があることが示唆された[1][2]。

今回も主にタイプ2に注目した実験を行う。ただし、先の実験では、敬語表現の自然さに着目したが、今回の実験では、敬語表現の丁寧さ、および改まりの程度に着目する。このうち、改まりの程度に関しては、言語学的な従来の研究において、和語と漢語の違いが指摘されてきた。すなわち、漢語の方が改まった趣が出る傾向があるとされている[3]。

本研究では、異なる敬語の形式に基づく敬語表現に関し、丁寧さ、および改まりの程度のそれぞれについて、一対比較法を用いて定量化し、統計的に分析した。このように客観的・定量的な分析は従来の研究では、ほとんどなかった。

2. 敬語表現のパターン

前述したタイプ1、タイプ2の敬語表現の主なものを、表1の謙讓語・尊敬語の欄に示す[3][4]。

表1の「～」の部分は各パターンと組み合わせられる動詞を表す。具体的には、タイプ1「～ます、～れる、～られる、～される」のパターンでは漢語・和語の両方、タイプ2のうち、「お～…」のパターンでは和語、「ご～…」のパターンでは漢語である。なお、本論文では、漢語とはサ変動詞を指し、和語とは和語動詞を指す。

なお、基本的に規範的な敬語表現を対象とするが、ここでは、「お／ご～になられる」のような二重敬語のパターンも加えている。その理由は、二重敬語は、敬語表現として実際によく用いられており、表現の自然さも高かった[1][2]ためである。

また、比較のため、実験では、丁寧語を作るパターンのうちの一つである「ます」と常体を用意した。

以上のように、実験に用いる敬語表現のパターンとしては、謙讓語9パターン、尊敬語9パターン、丁寧語1パターン、常体1パターンである(表1)。

表1 実験に用いる敬語表現のパターン

種類と数	パターン
謙讓語 9パターン	お／ご～する お／ご～します お／ご～できる お／ご～できます お／ご～致します お／ご～申します お／ご～申し上げます お／ご～頂く お／ご～頂きます
尊敬語 9パターン	～れる、～られる、～される ～なさる お／ご～なさる お／ご～なさいます お／ご～になる お／ご～になります お／ご～下さる お／ご～下さいます お／ご～になられる<二重敬語>
丁寧語	～ます
常体	～

3. 実験

3.1 実験刺激

本実験では、基本的な発話意図、かつ和語と漢語が両方、存在するもの、かつ、表1のパターンと組み合わせることができるものとして、表2の5つの発話意図を取り上げる。表2は各発話意図とそれに対応する和語、漢語である。

表2 発話意図とそれに対応する動詞

発話意図	和語	漢語
1 answer	答える	回答する
2 use	使う	使用する
3 explain	話す	説明する
4 contact	知らせる	連絡する
5 invite	招く	招待する

実験では、各発話意図に対して、刺激表現グループを2つずつ生成した。

1つ目の表現グループは、表1に示す謙讓語9パターン+丁寧語1パターン+常体1パターン=11パターンに関し、和語/漢語の2バリエーションを作った表現(計22個)からなる。発話意図: answer、パターン: 丁寧語+謙讓語の表現の例を表3.1に示

す。なお、この例では、常体の和語は「答える」で、常体の漢語は「回答する」である。

もう1つの表現グループは、表1に示す尊敬語9ボタン+丁寧語1ボタン+常体1ボタン=11ボタンに関し、和語/漢語の2バリエーションを作った表現(計22個)からなる。発話意図: answer、ボタン: 丁寧語+尊敬語の表現の例を表3.2に示す。従って、実験では発話意図5種類×刺激表現グループ2つ=計10個の刺激表現グループが用いられる。

ただし、一対比較実験は刺激表現グループ毎に独立して行った。この理由は、謙譲語と尊敬語との間で一対比較を行うことが困難であるためである。例えば、「お答えする」と「お答えなさる」では、行為主体が異なるため、比較が困難である。なお、常体および丁寧語は、謙譲語を含む表現グループおよび尊敬語を含む表現グループの両方に入っているが、これらは謙譲語および尊敬語と比較することが可能である。

表 3.1 実験刺激例
(発話意図: answer, ボタン: 丁寧語+謙譲語)

No	和語	No	漢語
1	答える	12	回答する
2	答えます	13	回答します
3	お答えする	14	ご回答する
4	お答えします	15	ご回答します
5	お答えできる	16	ご回答できる
6	お答えできます	17	ご回答できます
7	お答え致します	18	ご回答致します
8	お答え申し上げます	19	ご回答申し上げます
9	お答え申し上げます	20	ご回答申し上げます
10	お答え頂く	21	ご回答頂く
11	お答え頂きます	22	ご回答頂きます

表 3.2 実験刺激例
(発話意図: answer, ボタン: 丁寧語+尊敬語)

No	和語	No	漢語
1	答える	12	回答する
2	答えます	13	回答します
3	答えられる	14	回答される
4	答えなさる	15	回答なさる
5	お答えなさる	16	ご回答なさる
6	お答えなさいます	17	ご回答なさいます
7	お答えになります	18	ご回答になります
8	お答えになります	19	ご回答になります
9	お答え下さる	20	ご回答下さる
10	お答え下さいます	21	ご回答下さいます
11	お答えになられる	22	ご回答になられる

表 3.1 (表 3.2) における表現 No. は、その表現グループの中での通し番号である。表の左側の列が和語、右側の列が漢語である。同じ行に並んでいる表現は、接頭辞と動詞だけが異なり、あとの部分は同じ(もしくはかなり近い)ものが対応している。表 3.1(表 3.2)では、表現 No. 1 と No. 12 が常体、No. 2 と No. 13 が丁寧語、No. 3 から No. 11

と No. 14 から No. 22 が謙譲語(表 3.2 では尊敬語)である。

なお、動詞との組み合わせによっては、表 3.2 の No. 4 「答えなさる」のように、やや古めかしい表現が生成される場合があるが、比較対象の表現がなくなることを避けるため、あえて実験刺激に加えている。

3.2 実験手続き

被験者は関東在住の 80 人である。

前述の各表現グループにおける、22 個の表現に対する丁寧さ、および改まりの程度の印象を Scheffe の一対比較法、中屋の変法 [5] によって定量化する。各表現グループの実験刺激は、 ${}_{22}C_2 = 231$ (対)となる。

被験者によって想定する状況が異なるなどの影響を排除するため、被験者には、表現自体で丁寧さを判断するよう指示を与えた。具体的には、図 1 の適切な位置に○を付けるよう指示した。ただし、答えることが困難な場合は、×を付けることを認めた。

改まりの程度の実験に関しても、同じ実験刺激と同じ実験手続きを用いて行った。

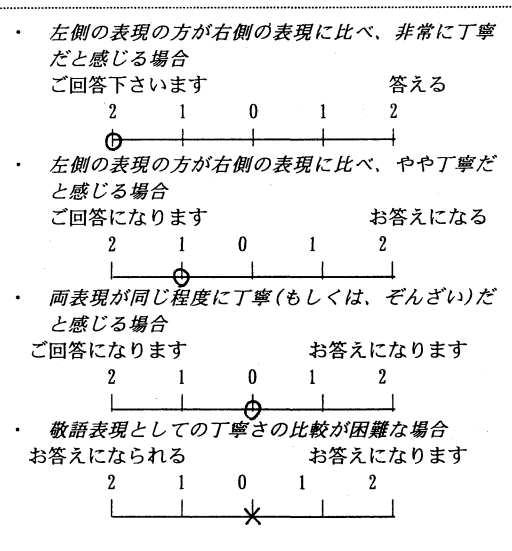


図 1 回答形式および回答の例

4. 実験結果

4.1 各刺激表現に対して得られた値

図 2.1 (図 2.2) 中の数字は、表現 E_i (i は表 3.1 (表 3.2) に示した表現の通し番号) に対応している。図 2.1 (図 2.2) の縦軸は、表現 E_i に対して、定量化によって得られた値の被験者平均を示す (v_i)。表現を特定しない場合は、 v と記す。エラーバーは被験者に関する標準偏差を示す。なお、□は丁寧さの v 、○は改まりの程度の v を表す。

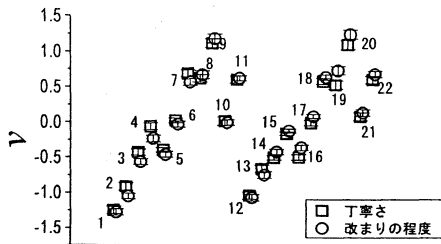


図 2.1 定量化値(表 3.1 に対応)

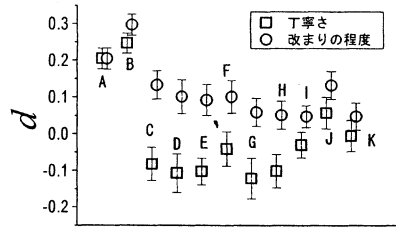


図 3.1 和語表現と漢語表現の比較(図 2.1 に対応)

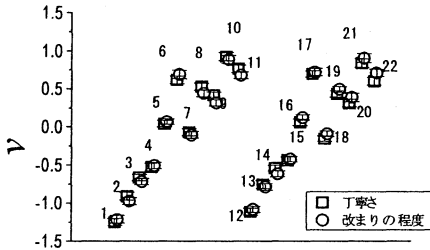


図 2.2 定量化値(表 3.2 に対応)

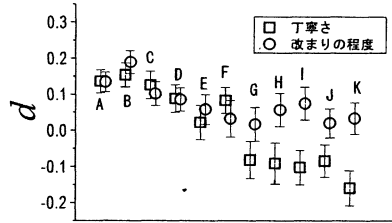


図 3.2 和語表現と漢語表現の比較(図 2.2 に対応)

4.2 和語表現と漢語表現の比較

前述の通り、表 3.1 および表 3.2 で同じ行に並んでいる表現は、接頭辞と動詞だけが異なり、あとの部分は同じ(もしくはかなり近い)ものが対応している。例えば、表 3.1 の No. 7「お答え致します」には、No. 18「ご回答致します」が対応している。

ここでは、このように対応した表現間での v の値の差 (d と記す) を式 (1) で計算することによって、漢語表現と和語表現の間の v の違いを調べる。

$$d = v_{i+11} - v_i \quad (i=1, \dots, 11) \quad (1)$$

ここで、 i は、表現 E_i の添数 i を表す。すなわち、式 (1) では、表現 No. 1 と No. 12、表現 No. 2 と No. 13、...、表現 No. 11 と No. 22 が、それぞれペアになる。

以上の方法で得た d を図 3.1(図 2.1 に対応) に示す。図中の記号(A, B, ..., K)は、それぞれ、表現ペア: No. 12-No. 1(常体), No. 13-No. 2(丁寧語), No. 14-No. 3(謙譲語), ..., No. 22-No. 11(謙譲語)に対応する。

図 3.1 および図 3.2 を見ると、丁寧さ、および改まりの程度に関し、A(常体)および B(丁寧語)において、 d が 0 以上であることが分かる。全ての表現グループにおいて、これと同様の傾向が見られた(結果①)。

4.3 常体からの変化量による「お」と「ご」の比較

4.2 では、「お+和語」「ご+漢語」全体としての和語表現と漢語表現の比較をしたが、ここでは、より詳細に、接頭辞「お」「ご」を用いた表現に変化させたことによる(常体の v からの) v の変化量を調べる。

このためには、常体の v からの変化量を求めた上で、式 (1) で用いたペアとなる表現間で、それぞれの変化量の差を計算するのが適切である(式 (2))。

$$\mu = (v_{i+11} - v_{i2}) - (v_i - v_1) \quad (i=2, \dots, 11) \quad (2)$$

式 (2) 右辺の第 1 項は、 v_{i+11} (漢語の表現 E_{i+11} の値)の v_{i2} (漢語常体の値)からの変化量である。第 2 項は、 v_i (和語の表現 E_i の値)の v_1 (和語常体の値)からの変化量である。

なお、 $i=2$ は丁寧語であり、「お」「ご」は含まないが、比較のため、加える。

以上の方法で得た μ を図 4.1(図 2.1 および図 3.1 に対応)および図 4.2(図 2.2 および図 3.2 に対応)に示す。

図 4.1 および図 4.2 を見ると、以下のことが分かる。

- ・ 丁寧さ、および改まりの程度に関し、丁寧語(B)以外の μ の値は概ねマイナスであることが分かる。ほとんど全ての表現グループにおいて、これと同様の傾向が見られた(結果②)。
- ・ 丁寧さ、および改まりの程度に関し、丁寧語

(B)の μ が0以上であった。これと同様の傾向が、10個の表現グループのうち、半数以上の表現グループにおいて見られた(結果③)。
 改まりの程度に比べて、丁寧さの方が概して μ の値が同じか小さい。ほとんど全ての表現グループにおいて、これと同様の傾向が見られた(結果④)。

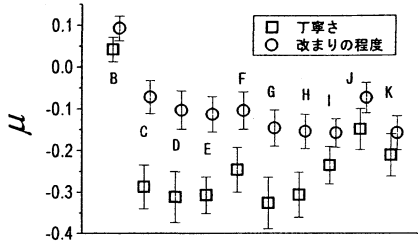


図 4.1 常体からの変化量に関しての和語と漢語の比較(図 2.1 および図 3.1 に対応)

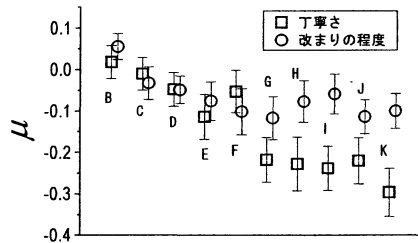


図 4.2 常体からの変化量に関しての和語と漢語の比較(図 2.2 および図 3.2 に対応)

5. 考察

5.1 「お」を用いた表現と「ご」を用いた表現に差異が生じた理由

結果②は、謙譲語・尊敬語では、(常体の v からの) v の変化量に関しては、接頭辞「お」を用いた表現の方が接頭辞「ご」を用いた表現より、丁寧さ、および改まりの程度の両方に関して、常体からの変化量が大きいことを示唆する。

ここで、常体の v が大きければ大きい程、それに対する v の変化量は小さくなる(変化量が鈍化する)という飽和現象があると仮定すると、今回の実験では、結果①に示したように漢語表現の方が常体の v の値が大きかったので、「ご」を用いた表現に変化させた場合の v の変化量が漢語表現の方が和語表現よりも小さかったという説明が可能である。

しかし、結果③のうち、丁寧語の v の変化量が、漢語表現の方がより大きかったグループに関しては、飽和現象では十分に説明できない。よって、さらなる解釈として、以下が考えられる。

漢語表現の場合、常体と「ご」を用いた表現の違いをあまり意識していない、つまり、「ご」が付くか否かを意識していないと考えられる。敬語表現の自然さに関する研究[1][2]でも、接頭辞「ご」の方が後の部分と一体感があり、「ご+漢語」表現に関しては、規範的に誤っているとされる表現と、規範的な表現との差異が区別しにくいことが示唆されていた。よって、「ご」の方が後の部分と一体感があるため、「お」に比べて、付けたという意識が低いことから、「ご」を用いた表現に変化させた場合の変化量も少なくなったと考えられる。

5.2 丁寧さと改まりの程度の違いに関する考察

結果④の通り、丁寧さに比べて改まりの程度の方が概して μ の絶対値が小さい。すなわち、「お」を用いた表現と「ご」を用いた表現の、それぞれの常体からの変化量において、丁寧さと改まりの程度の間で、改まりの程度の方が差が小さい。

これは、5.1で述べた、接頭辞と後続する語との一体感に関して、丁寧さの観点からと改まりの程度との観点から、差があったことに起因すると考えられる。

6. おわりに

いろいろな敬語表現に対する丁寧さ、および改まりの程度の印象の大きさを数値化し、統計的に分析した。その結果、常体を接頭辞を用いた表現に変化させた時の、常体からの変化量に関して、以下のことが示唆された。

- 接頭辞「お」を用いた表現の方が接頭辞「ご」を用いた表現より、丁寧さ、および改まりの程度の両方に関して、常体からの変化量が大きくなることが示唆された。
- 接頭辞「お」を用いた表現と接頭辞「ご」を用いた表現の、それぞれの常体からの変化量において、丁寧さと改まりの程度の間で、改まりの程度の方が差が小さいことが示唆された。

本研究では、いろいろな敬語表現のパターンに対して定量化した値が得られた。これに基づいて、敬語表現のパターンの差異によって生じる印象の違いを数値化することができるため、敬語表現教育システムに役立てることができる。さらに、この値は、敬語表現の数値モデルの構築に利用できる可能性がある。

今後の課題としては、被験者属性への依存性を調査する予定である。

文献

- 丸元聡子, 白土保, 井佐原均, “敬語表現の誤用の認知に関する分析,” 人工知能学会 ことば工学研究会資料 SIG-LSE-A101-2, 2001.
- S. Marumoto, T. Shirado and H. Isahara, “A study of polite expressions deviated from norms”, The 6th World Multiconference on Systemics, Cybernetics and Informatics Proceedings, Orlando, 2002.
- 菊池康人, “敬語”, 講談社, 1997.
- 林四郎, 南不二男編集, “敬語講座 1 敬語の体系”, 明治書院, 1974.
- 三浦新他編, “官能検査ハンドブック”, 日科技連, 1973.